シルヴィは大きく股をひろげたあられもない格好で、淫欲にまみれたよがり泣きをほとばしらせた。丸見えの結合部からは白っぽい本気汁が溢れて、支配者の逞しい男根を濡らしていく。

「もうグチョグチョですよ。おおっ、絡みついてくる」

アヒムの声の合間に、貴族たちの息づかいが聞こえてくる。

彼らが獣欲に濁った瞳で注目しているのは、最初からずっと気づいていた。それなのに……いや、それだからこそ見せつけるように腰を回転させてしまう。

（見てください……これが、本当の私……）

国を守るという重圧から解放されたシルヴィは、やっと一人の女に戻ることができたのだ。

「ヴィー……」

そのとき懐かしい響きが聞こえてきて、虚ろな瞳で足もとを見おろしていく。

「あっ……あっ……リミィ……」

ごく自然に、子供の頃の愛称で呼んでいた。甘えては姉のあとを追いかけていた、幼いあのときのように……。口うるさい乳母たちから逃れて姉と遊んだ短いひととき、お互いに愛称で呼び合うことは二人だけの秘密だった。

昔のようにやわらかい笑みを浮かべたリミアが、慈しむような眼差しで見あげてくる。王女でも団長でもなく、ただの少女に戻れた妹を祝福するような、そんなやさしい瞳だった。

「大好きよ……」

リミアはひとり言のようにつぶやくと、さりげない仕草で股間に顔を埋めてくる。

「ひゃっ！　あひっ……ひぁぁ、そんな……ひいいっ」

剛直がずっぽり埋まった恥裂に舌を這わされて、シルヴィはたまらず裏返ったよがり泣きをほとばしらせた。

「もっと気持ちよくなって……はむっ」

やさしく語りかけると、リミアは勃起した肉芽を唇で挟みこむ。そしてツルンとした頭の部分を、舌先でチロチロとくすぐってくる。

「ひンンっ！　あ、リミィ……」

女ならではのテクニックに、あっという間に溺れていく。

蜜壺を逞しい男根で抉られながら、肉豆を姉の舌でねぶられているのだ。催淫薬で性感を高められた肉体は、狂いそうなほどに燃えあがる。

「もう、我慢することないのよ」

朦朧(もうろう)とした頭に聞こえてきたその声は、正気に戻っているように感じられた。
(あ、姉上……)
本当は最初から、ずっと正気だったのかもしれない。もしかしたら、犯されて調教されていくうちに、女の悦びに目覚めただけなのではないか……。
だが、もうそんなことを追及する気はない。めくるめく快楽の果てに訪れる歓喜の瞬間に向かって、恥も外聞もかなぐり捨てて腰を振りたくる。
「あっ、あっ……もっと、あンンっ……もっと、奥まで……あああっ」
「くぉぉっ。ここか? ここがいいのか?」
シルヴィが剛直を締めつけて甘くおねだりすれば、アヒムもうめき声をもらしながら激しく腰を突きあげる。
結合部から淫汁が飛び散って、リミアの顔を汚していく。妹の汁を浴びて恍惚(こうこつ)となった姉は、さらに淫靡(いんび)に舌を這わせていく。
「うふンっ、ヴィー……アヒム様……」
リミアは自分の蜜壺に指を挿入して自慰に耽(ふけ)りながら、妹と支配者に熱心な口唇奉仕を施しつづける。
「ひああっ、だ、ダメ……リミィ、そんなにしたら……」

「おううっ、これは……すごい」
背面座位で交わりながら、結合部をしゃぶられる。シルヴィは硬くなった肉芽を、アヒムは玉袋を舐められて、急激に性感を昂らせる。
「ひッ、ひいッ……アヒム様……も、もう……」
「ううっ、いいですよ。イカせてあげます……くっ、出しますよ！　うおおっ」
アヒムは亀頭を最奥部まで到達させると、ついに極太をビクビクと脈動させた。
尿道口がパクッと開いて、煮えたぎった白濁液を勢いよく噴きあげる。戦姫を孕ませるための濃厚なザーメンを、まるで放尿するように注ぎこんでいく。
「あひいいッ！　す、すご……ひああっ、こんなにいっぱい……妊娠しちゃうっ」
子宮口に恐ろしい量の体液を叩きつけられて、シルヴィはたまらず白目を剝いて絶叫する。涎れを垂らしてオッパイを揺すりながら、肉棒を締めつけて泣きわめく。
「うああっ、イク……もうイキますっ……ああッ、イックぅぅぅッッ！」
そしてついにはオシッコをしぶかせながら、死にも勝る激烈なオルガスムスに呑みこまれていくのだ。
「ああ、ヴィー……あっ、あっ……あっふぅぅッ」
妹の尿にまみれて悶えるリミアも、自分の指で絶頂に達していた。

ニーベルジュの王女から性奴隷に墜とされた美姉妹に、貴族たちの蔑(さげす)みの視線が浴びせかけられる。

しかしシルヴィとリミアは、心の底から女の悦びに浸っていた。

そして子宮に注ぎこまれたザーメンが確実に根づくのを感じて、被虐の余韻に打ち震えるのだった。